

# 愚考考古学 ⑧

中 林 幸 夫

「さらば」の語源はこゝからか

(会員・佐伯市長島町)

前号、佐伯史談第一五二号の「日向路古代への旅」(岩田正城)を楽しく拝読させていただき、宮崎県南郷村の御門神社のことを思い出したので書いてみたい。

岩田氏が書かれているように、南郷村の御門神社は、古代史の謎とロマンを秘めた銅鏡三十三面(二十四面?)を所有している。

村では、この銅鏡を前面に売り出して、西の正倉院として建設する予定と聞いている。

この銅鏡は、約千三百年程前に、朝鮮半島の古代国家百済から、この地に亡命してきた王族が持ってきたもの言い伝えがある。

御門神社のことは一つの伝説にすぎないが、宮崎県には、西都原古墳をはじめ、日本の歴史に影響を及ぼす天孫降臨等、謎の部分も多く残されている。

そのため、平成元年二月九日、NHK(日本放送協会)は、御門神社のことを、「シリーズ海の道・はるか百済の風が吹く」というタイトルで取り上げ、これを放映した。

この放送は、近隣にある木城町の比木神社の御玉が、一年に一回、みこしに乗って、御門神社に逢い来ることが主題になっていた。

木城町の比木神社は、南郷村御門神社の子供とのことである。子供の神が、父親の御門に逢った後、帰って行くくだりがある。

その別れの場面にあたり、帰って行く子供のみこしを南郷の村人達は、たいまつを手に「さらばさらば」と言っ、名残りを惜しみ、せつなげに見送るのである。

その「さらば」という言葉を辞書で見ると、「然らば」

別れの言葉と書いてあるが、語源の由来までは書いていない。

今まで、私も「さらば」は単なる別れのあいさつの言葉と思っていたが、この番組を見ていて、親が子に送る愛情を込めた深い意味のある別れの言葉だということを知った。

「さらば」。即ち朝鮮語の「<sup>サラム</sup>사별(愛)하(す)」という言葉である。

「<sup>サム</sup>사랑」とは、今日、朝鮮語で「愛する」という言葉で使われているが、本来、親が子をいたわり、いつくしむ等という、深い意味の愛するという言葉だそうである。



このような意味あいを込めて、親の御門が子に向って、別れの言葉として「さらばさらば」と、手を振ったことを考えると、さらばの実感がわいてくる。別れの言葉の「さ

らば」は、こうして生まれたものと、私は信じている。

日本語の中には、渡来した朝鮮人の使用する言葉が日本語になっているものが多く、多分、この村の周辺にはこれに似た朝鮮語が訛った言葉が使用されていると思う。邪馬台国や吉野ヶ里等、昨今は九州北部に人々は向っているが、九州南部にも古代史を解く大きな鍵があり思うに思われる。何故、遠い百済の王が宮崎県に亡命しなければならなかったのか。王を乗せた船が豊後水道を南下したのなら、佐伯浜辺にも立ち寄ったことだろう。

(百済―三世紀頃朝鮮全羅北道に存在)

「さらば」の文献記録は、百人一首に記載があることから、平安時代から日本語として使われているようである。

先日、鶴谷城跡の石垣を一人で見て回りながら、一番大きな石はどれだろうかと考えた。そんなことで、佐伯地方の歴史物件等の、たとえば一番古い寺・神社など、いわばギネスブック的なものは出来ないだろうか…。